

『風流志道軒伝』における仙境描写

——異郷訪問譚の系譜を視座として——

付 曉 靈

一 はじめに

平賀源内(号、風来山人)の談義本『風流志道軒伝』五巻は、宝暦十三年(一七六三)十一月、江戸で刊行された。本書は、深井志道軒を主人公に借り、その諸国遍歴を内容とする作品である。

『風流志道軒伝』巻一で、浅之進(志道軒)は、卵から出た美女によって、木の下の穴に連れてゆかれ、仙境に至る。この仙境訪問譚は主人公の遍歴譚の初発・前提であり、本作で重要な意味を持つ。仙境描写の本文は以下のとおりである。

咲乱たる桃花の下、石なんどのありて、其中に小き穴の有けるが、其穴の中へ伴ひ行たり。此穴上より見たる時は、わづか五六寸の穴なりけるが、行時はまた人の身の通ふべき程の道とぞ成たり。行こと十間あまりになれば、其内平にして、犬鶏の声なんどのほの聞えて、さまざまの木草生しげり、梅が枝に木伝ふ鶯あれば、かたへには卵の花の垣根いと白く、雲井には子規のおとづれ、紅葉に鳴小男鹿の声、或はまた川風さむみ千鳥のむれ居て、雪の降しく所もあり、四時の花実時をあらそひ、砂の色も常ならず、行水

の音までも、其清々たる事また有べきにもあらず。それより遙歩行ば、忽ならぬ匂ひの薫来て、管弦の音ほの聞えつゝ、玉をかざれる楼閣あり。金銀の砂を敷渡し、瑠璃の階・馬腦の欄干、また譬るにもなし。浅之進は此処に至りて、少し猶予し居たれば、彼美女、「かく来れ」とて先に立、幾間ともなく廊下を伝ひ行て、一間なる所へ請じ入り。

〔風流志道軒伝』巻一) この仙境描写は、一見すると『風流志道軒伝』の大筋とは関わらないように見えるが、本書の主な筋と認められる諸国遍歴の部分を見ると、十余国のことが書かれるにも関わらず、景色に関する描写は殆どない(巻四の長脚国「草木の形も見なれざるもの多く、川水の色も異なるさま」の一文のみ)。一方、仙境については、描写が詳しく、分量も多いため、源内が力を注いだ部分だと判断できよう。

この仙境訪問譚の典拠や類似性を持つ先蹤について、美女が案内するのは『遊仙窟』^①、小道を通つて仙境に入るのは「桃花源記」^②によると指摘されるほか、「武陵桃源」、「劉阮天台」の故事^③も提示される。また、仙境が木の下にあるのは、淳于禁が槐安国へ行った「槐下穴」に想を得た可能性^④や、『諷

訪の本地』『かくれ里』など日本的な地下仙境譚の系統であること⁽⁵⁾が指摘される。

このように、『風流志道軒伝』における仙境描写には種々のモチーフがあり、それぞれ注目される。一方、傍線部のような、仙境に四季の景色が同時に見えること（以下、四季同時）に関する検討は、必ずしも十分ではない。『風来山人集』の頭注に、

- ・以下四季の景を一時に見る仙境の説明。玉葉、春上「花はなほ枝にこもりて鶯のこつたふ声ぞいろはありける」。
- ・同、夏「ほととぎす空に声して卯の花の垣根も白く月ぞ出でぬる」。

・子規・小男鹿共に和歌的な表現。

・拾遺、冬「思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風さむみ千鳥鳴くなり」。

と挙げられたように、和歌的表現を用いていることが指摘される程度である。

四季同時の趣向は、既に示される中国側の典拠に見当たらず、他の漢籍における仙境描写を見渡しても、一般的ではないようである⁽⁶⁾。また、仙境が地下にあることの先蹤として言及される、日本側の『諏訪の本地』『かくれ里』の本文を確認すると、複数の季節の景物が存在する要素も見られるが、両作は表現上、『風流志道軒伝』との一致度が低い⁽⁷⁾点から、少なくとも四季同時については、両作は『風流志道軒伝』との関係が薄いと考えられる。

では、源内の四季同時の描写はどこから来たのか。なぜこのような描写が彼の描く仙境に必要であったのか。

源内の仙境描写が、漢籍由来の描写・構想を土台にしている

ことは、「桃花源記」や『遊仙窟』との類似点の多さから確認できる。この原典を和訳したような唐土風の濃い仙境の中、突如として和歌的景色が展開されるのは、やや不自然である。漢籍由来の表現を模倣するだけでも仙境を描くことができるにもかかわらず、殊更に和歌的表現を挿入することには、どのような意図があるのだろうか。四季描写の検討は、源内の創作意識の一端を解明することにも繋がると思われる。

本稿では、まず、源内の四季描写の先蹤について、中世における異郷（仙境、童宮、鬼国、酒吞童子の住処など）訪問譚の先行研究を踏まえて類似例を挙げる。次いで、四季同時の描写を創作に利用する意味を解明するために、源内の時代（近世前中期）における異郷訪問譚の様相を検討する。それを通じて、『風流志道軒伝』の仙境描写の特徴を把握し、源内の創作姿勢を考察する。

二 源内の四季描写の先蹤——中世における異郷描写

源内の仙境描写には、前述のように和歌的表現が見られるが、源内より少し遡れば、このような仙境の四季描写は、彼の創作ではなく、中世における異郷訪問譚における常套表現であることが確認できる。

中世における異郷訪問譚については、多くの先行研究が備わっている⁽⁸⁾。その成果を踏まえ、中世における異郷描写の特徴をまとめると、以下のとおりである。

・「四方四季」（四方に四季の植物を配置すること）の趣向が多く見られ、方位と季節との対応関係は「東—春、南

—夏、西—秋、北—冬—である。四季の同時存在が多い。四季描写において、季節を代表する植物の使用、歌語の使用が一般的であり、典型的表現がなされる。

・建物、砂、木などに、金・銀・瑠璃・瑪瑙・玉・琥珀など修飾語の使用が多く、類型的表現がなされる。

先行研究に示された、四季の趣向を有する中世の異郷訪問譚作品を表一に纏める。『風流志道軒伝』との共通要素として、当該作品の四季描写にある景物を、本文から抜き出して示す。

なお、使用する底本が近世刊行・書写のものがあるが、作品自体は中世の成立であるため、創作の観点から、先行研究と同様に、これらの中世の異郷訪問譚とすることを断っておく。

表一 中世の異郷描写と『風流志道軒伝』との共通要素

【凡例】

1. 作品は可能な限り成立順に配列したが、成立年代の推定範囲が広いもの、未詳のものが多いため、前後する場合があります。
2. 刊本のある作品は、刊本を使用する。ただし、源内自身が作中で言及した浦島伝説については、四季同時の趣向がある諸本を表一に取り上げる。
3. 「●」は、その要素が作品に見えることを示す。
4. 『風流志道軒伝』との共通要素」欄の表記は底本に従う。

番号	作品名	同時四季	『風流志道軒伝』との共通要素	場所	底本
①	『曾我物語』十行古活字版 『貴船の本地』承応明暦頃刊 丹緑本 『青葉の笛の物語』寛文七年 版本	●	うぐひす、むめ、もみぢ	仙境 鬼国	『日本古典文学大系』八十八 『室町時代物語大成』四
②	『たなばた』京都大学美学研究室蔵奈良絵本 『うらしまた下』日本民芸協会蔵古絵巻 室町中期写	●	むめ、うのはな、山ほととぎす、もみぢゆき、かぜ	天上	『室町時代物語大成』二
③	『うらしまた下』日本民芸協会蔵古絵巻 室町中期写	●	むめ、しらゆき	童宮	『室町時代物語大成』二
④	『うらしまた』赤木文庫蔵奈良絵巻、近世初期写	●	むめ、うぐひす、むめ、あらし、雪	童宮	『室町時代物語大成』二
⑤	『浦島太郎』古梓堂文庫蔵絵巻、慶長、寛永頃写 『うらしまた』高安六郎・氏蔵奈良絵本、寛文頃写	●	うぐひす、やまほ	蓬葉	『室町時代物語大成』五
⑥	『浦嶋太郎』渋川版 『うら嶋太郎物語』禿氏祐祚氏蔵写本 近世中期頃写	●	梅、鶯、印花、ほ	童宮	『日本古典文学大系』三十八 『室町時代物語大成』五
⑦	『田村の草子』寛永頃刊古活字版 『すそひろ物語』赤木文庫蔵絵巻 寛文、元禄頃写	●	むめ、鶯、卯のはな、ほととぎす	童宮	『室町時代物語大成』七
⑧	『不老不死』大坂市立美術館蔵絵巻、寛文、元禄頃写	●	うぐひす、梅がさ	童宮	『室町時代物語大成』十一
⑨	『伊吹山絵写』小川本、寛永頃写 『酒香童子』渋川版	●	梅がえ、鶯、卯のはな、ほととぎす、紅葉は、雪	鬼城	『室町時代物語大成』十一 『日本古典文学大系』三十八
⑩	『伊吹山絵写』小川本、寛永頃写 『酒香童子』渋川版	●	梅、鶯、山ほととぎす、もみぢあらし、雷	鬼の住処	『日本古典文学大系』三十八

表一の中には、刊本のある作品(表一①②③⑤⑥⑩)もある。ただし、それらの四季描写には『風流志道軒伝』と重なる部分がある一方、相違もあり、ただちに刊本の直接的影響を認めるのは躊躇われる。

たとえば、源内自身が作中で言及する^⑤浦島伝説について、
渋川版『浦嶋太郎』(表一⑤)の該当部分を確認しておく。

冗長を避けるため、該当本文のみを摘記して示すことにする(以下同)。番号の①②③④は、それぞれ春夏秋冬を表す。

- ① 梅や桜の咲き乱れ
- ② なびく霞のうちよりも、鶯の音も軒近く
- ③ 春をへだつる垣穂には、卯花や、まづ咲きぬらん
- ④ 夕立過る雲間より、声たて通るほととぎす
- ⑤ 西は秋とうち見えて、四方の梢も紅葉して
- ⑥ 声ものすこき鹿の音に
- ⑦ 雪に埋るゝ谷の戸に

(渋川版『浦嶋太郎』)

春は梅と鶯、夏は卯花とほととぎす、秋は紅葉と鹿、冬は雪、というモチーフが描かれる点が共通する。一方、『風流志道軒伝』にある、鶯が梅の枝を木伝うという表現や、ほととぎすと併せて用いられる「雲井」の語、卯花と併せて用いられる「垣根」、秋の「小男鹿」、冬の「千鳥」などは、『浦嶋太郎』には見られない。なお、浦島伝説に関する諸本間には異同があるが、以上に挙げた相違点については、様相は大きく変わらない。

表現の上で浦島関係作品よりも若干類似性の高い作品を挙げると、赤木文庫旧蔵絵巻『すゑひろ物語』(表一⑦)がある。本作における仙家の四季描写に、以下のような部分がある。

- ① 谷のうぐひす、軒ちかく、梅がさえたに、つたひては

② かきねに白く見えわたる、卯のはなの、よそほひは

③ 雲井に名のる、ほととぎす

④ まどのみぢ葉、うすくこく

⑤ 妻こふ鹿の、こゑぐゝに

⑥ 雪のしたなる、谷川も

⑦ 嶺ふくあらし、はげしきに、羽がひをかはず、鴨鳥の、をしねの夢や

『すゑひろ物語』は、秋の鹿が「妻こふ鹿」となっている点、

冬に「鴨鳥」が用いられる点は『風流志道軒伝』と異なるが、大半(特に春夏)において、表現の一致が見られ、全体的に『浦嶋太郎』より類似性が高いと考えられる。

前掲の例は室町時代に成立した作品であるが、江戸時代に新たに創作された作品にも類似例が存在する。寛文二年(一六六二)刊『安倍晴明物語』における童宮の四季描写に、以下のような部分がある。

① 谷の鶯軒ちかき梅の小枝に、来鳴つゝ

② 垣ねに白き、卯の花

③ 雲井になのる、ほととぎす

④ 時雨にそむる、紅葉の色

⑤ 遠近鹿の、声たてゝ。妻とふ夜半こそ、あはれなれ

⑥ 北のかたにハ、嵐ふく。こずゑハ雪の、花咲て

(『安倍晴明物語』巻二)

『安倍晴明物語』の場合、春の「木伝ふ」、秋の「小男鹿」、冬の「千鳥」などがないのは『風流志道軒伝』と異なるが、夏の描写は一致度が高いと考えられる。

以上に挙げた先例は、『風流志道軒伝』との類似もあり、小

異もあり、いずれも源内の直接依拠した資料とは確定できない。また、源内が冬の描写において千鳥を描くのは、直接的な依拠資料によるものなのか、単に冬の歌語であるから用いただけなのかも、現時点では判断しかねる。しかしながら、『風流志道軒伝』の仙境描写の一部を成す四季描写が、こうした日本における先蹤に負っていることは動かないであろう。

三 近世の異郷描写の系譜から見た『風流志道軒伝』

前節で、源内の四季描写が、中世の伝統の系譜に連なるものであることを確認した。源内の時代に、この趣向を漢籍の描写と融合させて創作に利用することは、どのような意味を持っていたのか。それを考えるには、近世期に成立した異郷訪問譚の異郷描写の系譜を概観する必要がある。

『風流志道軒伝』以前に成立した仮名草子、浮世草子その他小説類、草双紙における異郷訪問譚について、四季同時の趣向や四季の景物がどのように描写されているのかを調査した。

調査対象は、仮名草子は『仮名草子集成』第一巻く第六十九卷^①所収の作品、浮世草子は浮世草子大事典編集委員会編『浮世草子大事典』^②、草双紙は叢の会編『草双紙事典』^③所収の作品である。これらに加え、先行研究で源内作品への影響が指摘されている、談義本を中心とした十九点^{④⑤}も対象とした。調査方法について、仮名草子は本文を通読し、浮世草子と草双紙は、事典の梗概を参照して異郷訪問譚を特定し、本文を確認した。その結果を表にまとめた(後掲表二、表三、表四)。

まず、仮名草子の異郷訪問譚(表二)については、『仮名草

子集成』既刊分の内、異郷の四季同時という趣向は、前掲『安倍晴明物語』(表二③)に例が見える程度で、中世の作品に比べ、ごく少量である。

仮名草子において、四季同時の趣向を用いない場合の異郷描写の傾向を確認すると、以下のことが分かる。

第一に、四季の景物に比べて多用されるのは、珍しい植物(名もしらぬ草の花)「異草」など見慣れない植物、「七宝の樹」など想像上の植物を総称したもの^⑥である。なお、これは仏典、漢籍^{⑦⑧}にも散見し、日本独特の趣向ではない。

第二に、作品の多くが翻案・翻訳作品であるため、異郷描写は原典に従うものが多い。たとえば、描写の有無(表二④⑤⑨⑩)、描写なし)、前述の珍しい植物(表二⑤)における二例)、描写における実在の植物の種類(松、桑、麻、槐)など、原典を継承したものが多い。四季同時の例が少ないのは、この点に関連するであろう。

また、浮世草子と談義本(表三)においても、四季同時と推定できる作品は多くない。『風流志道軒伝』のほかに、五作がある。

まず、地獄物の系統に属する三作を確認していく。その一つは、井原西鶴著『椀久二世の物語』(表三⑨)であり、描かれるのは地獄における住家である。

我最後よりけふ迄日数折れば、極月廿八日かと覚しが、春の事ども拵へる沙汰もなく、書出しの取やりなく、只ぼうぜんとしたる住家千草万木四季のわかちもなく、^①梢の楊梅見れば、^②水仙の花ざかりに、^③野は秋萩のみだれ、^④松

には藤のちりかかり、^⑤茄子島に唐辛子いろづき、さても

わけなき所ぞかし。椀久草庵とおもふ所の内に入て、折節
雨の夜の淋しさ、むかしを今かたり慰むより外の事なし。

〔椀久二世の物語〕上巻)

源内著『根南志具佐』が「地獄物・追善物・際物という要素
において、西鶴の流れを汲む浮世草子に多くを負つて成立した」
一方、「直接的な文句取りが殆ど見られない」ことが、石上敏
「平賀源内の戯作への浮世草子の影響について」^{〔45〕}に指摘さ
れる。右の異郷描写を確認すると、描かれるのは楊梅、茄子、
水仙、秋萩、藤などであり、『風流志道軒伝』の要素と異なる。
具体的な文言の一致が見られないことは石上氏の指摘と符合す
る。

また、同様のことは、『椀久二世の物語』と同じく地獄物で、
幻夢著『西鶴冥途物語』(表三⑫)の極楽描写、西沢一風著『好
色閻魔歌舞記』(表三⑬)の地獄描写にも見られる。

扱そののちさいくはくげんむ兩人は、七ぼうのきざはしに
ひざまづき、歌道万とくのそんよう、人丸のけぶつをおが
みたてまつれば、(中略) ひがしのかたは春のけしき、(中
略) ①うぐいす、ひばり、きゝすへ鳥、(中略) 南のかた
は夏のてい、(中略) ②初ほとゝぎすをとづれて、連衆の
句をや吟ずらん(中略) ③にしきにまがふもみぢ葉の、み
ぎはの草にとゞまりて(中略) ④こずゑにかゝるしら雪の、
はなにあらそふばかりなり。 〔西鶴冥途物語〕巻四)

瑠璃のしとみ琥珀のうつばり。鳳の瓦は五色にかゝやき。
宮殿軒をならべろうかくつまをかさねたり。①遠山にのこ
る雪。霞ながらに風吹は軒はの梅のさきにほひ。うぐひす

の声めづらしき初桜。②松かげに見る突山よりながるゝ滝
の水さぬさみとして(中略) ③平砂にあそぶ雁金。芦辺を
わくるむら鷺。④手がいの鶴の羽をやすめ。むれあるつば
さ爰かしこ。右に孔雀舞あそべば。⑤鴛鴦ねむりをさます
気色。 〔好色閻魔歌舞記〕巻一)

『西鶴冥途物語』においては、大量の景物のうちに、傍線部
のような、源内の描写と重なる景物も含まれる。ただし、前後
の表現の一致度は中世の類型表現には及ばない。『好色閻魔歌
舞記』に様々な景物があることは先行地獄物の流れを受けたも
のであるが、本作には「四季」の文言や春夏秋冬の明示はな
かった。

このように、西鶴の流れを汲む浮世草子における異郷描写が、
『風流志道軒伝』のヒントとなった可能性はある。ただし、表
現としては『風流志道軒伝』は、第二節に挙げた中世の類型表
現に近い。

また、四季の詳細描写のある三例においては、(建物などに
関する常套表現を除き^{〔46〕})『風流志道軒伝』に見えるような
漢籍の描写と融合させる姿勢が見られない。なお、このことは、
第二節に纏めた先例においても同様である。

次に、地獄物ではない二作の本文を掲げる。

玄関を上りおくふかく行て。四季の間に客僧たちをせうじ。
お竹八内に入れる。 〔好色酒吞童子〕巻四)

右の『好色酒吞童子』(表三⑩)は酒吞童子伝説をもじった
好色物であり、訪れる場所(隠家)に、傍線部のように「四季
の間」がある。しかし、詳細描写はない。

四季の詳細描写がないことは、克齋著『風俗遊仙窟』(表三

③)においても同様である。

暫らく佇む所に。売炭の翁に行遇たり。かのもの指さして。是なん神仙の窟なりと教ぬ。心ゆかしく行々てみれば。四季折々の気色を同時に備へ。そのほか目なれぬ草木。花開け実をむすぶ。文生あやしくそのかみ唐土の人桃源に至り。我朝の浦島がむかし物語の格にやと。そらに信を發し。

『風俗遊仙窟』卷一)

『風俗遊仙窟』は『遊仙窟』を元にした仙境訪問譚であり、その仙境描写に「四季折々の気色を同時に備へ」とある。また、傍線部のように作中に「桃花源記」と浦島伝説を用いる点や、両作に細かい要素の一致が見られる点⁷⁷から、源内が本作を直接参考にしたことも考えられる。一方、同じく漢籍を利用しているが、歌語で構成される詳細な四季描写を加えることは、『風流志道軒伝』の『風俗遊仙窟』と異なる特徴である。

これまで見たように、表三において、『風流志道軒伝』以前に四季の詳細描写があるものは僅か三作しかなく、中世に作られた作品に比べてごく少量である。

四季同時の趣向が用いられない場合、仮名草子の場合と同様に珍しい植物が登場するほか、外部の世界と異なる季節である描写(表三③『西鶴諸国ばなし』「折ふしは冬山を分けのぼり、落葉の霜をふみて来りしに、この景色は春なれや」)や、同じ季節が続く描写(表三⑩『多満寸太礼』「此国つねに四季なふして、寒暑なし。いつも吾朝の秋に似たり」)、常に多くの花が咲いている描写(源内の『根南志具佐』に影響を与えたと知られる表三⑭『不埒物語』「四季にむりやうの花咲」)などが見られる。

また、表三⑬『小夜嵐物語』は、源内の『根南志具佐』に影響を与えたことが知られる⁷⁸が、その異郷描写に注目すると、

或時大王南殿に出御なりしに、比は暁月中旬の事なれば、遠山にのこる雪は、かすみながらに風ふれて、軒端の梅のさきにほひ、園の鶯ほのかなる声めづらしき初桜。

『小夜嵐物語』卷一)

のように、描いたのは春のみであり、四季のことには言及がない。源内は『小夜嵐物語』の異郷描写を知っていたが、利用しなかったようである。

草双紙(表四)に至ると、四季の同時存在が顕著に見られる作品は、今回の調査範囲ではにわかに見出せない。

表四に挙げた作品には、伝統的な「四季」の植物に比べ、それぞれの場合に適した植物が多く描かれる。たとえば、天狗と関連のある植物として知られる⁷⁹杉は、草双紙において、異類・怪物(天狗、土蜘蛛、鬼など)の登場する場面や、山の描写に使用するのが一般的である。

以上より、中世日本の異郷訪問譚に多く見られる四季同時は、近世の新たな創作物においては必ずしも一般的ではなく、中世以来の異郷描写の型が崩れていることが明らかになった。また、漢籍由来の描写を土台にしつつ、歌語で構成される表現を付加する描き方は、日本における異郷訪問譚の中でも稀なものと考えられ、『風流志道軒伝』の特徴であると言える。

これを踏まえると、『風流志道軒伝』における仙境描写は、源内が多く影響を受けているような近世期の作品の異郷描写の流れを安易に踏襲したものではないことが知られ、このような仙境描写を意識的に行ったことが推測される。

四 源内の漢籍受容の姿勢

源内の仙境の描き方には、どのような意味があるのだろうか。それを考える際、一つの可能性として、彼の漢籍や中国文化受容の姿勢を示しておきたい。

美女が案内すること、小道を通って仙境に入ること、仙境が木の下にあることが漢籍にも見られるのに対して、和歌の表現で構成される四季同時の描写は、日本独特の趣向と言える。漢籍を利用するとともに、日本的な要素を付け加える点について、類似した措置は、『風流志道軒伝』において、ほかにも例が挙げられる。

たとえば、拙稿『風流志道軒伝』における仙人伝記の利用^{〔三十一〕}で示したとおり、風来仙人の外見描写には中国の仙人伝記の表現が借用されているが、該当箇所^{〔三十二〕}に中国仙人の人名が明示されることはなく、風来仙人が

我は其昔元曆年中の生まれにして、源平の戦などは稚心の耳に残、漸天下治て、鎌倉將軍政を専にし、諸人太平の化をたのしむ。
〔風流志道軒伝〕卷一

と述べるように、「元曆」や「源平の戦」など日本的要素が追加されており、風来仙人は日本生まれの仙人と設定されている。

また、同論文で指摘したとおり、源内は『風流志道軒伝』における羽扇の不思議な力について、中国の仙人伝記の表現と構想を利用しているが、中国の仙人伝記との関連を明言しない一方、浅之進が空を飛ぶ場面（仙人伝記にも存在する能力）で、大人国の人^{〔三十三〕}が

是は定て日本に沢山なる天狗にてやあらん

と述べるように、日本の天狗との関連を想起させる。
〔風流志道軒伝〕卷三

このような漢籍を利用しながらも日本的な要素を強調する態度から想起されるのは、以下に挙げる風来仙人の発言である。

是さへ教あしき時は、迂儒学究とて、上下を着て井戸をさらへ、火打箱で甘藷を焼、唐の反古にしばられて、我身が我自由にならぬ具足の虫干見のごとく、四角八面に喰しぱつても、ない智恵は出ざれば、却て世間なみの者にもおとれり。是を名付て腐儒といひ、また屁ツびり儒者ともいふ。されば味噌のみそくさきと、学者の学者くさきは、さんぐくのものなりとて、又是を見破たる先生たち、宋儒の頭巾氣ととなへ出せし卓見も、角を直さんとて牛を殺。其末流の木葉儒者には、猪牙に乗てひちりきを吹、三弦に唐音を乗、甚しきに至ては、天下を運す掌の内に、お花とやらをめぐらす、言語同断の学者も有よし。是皆中庸を知らずと、鼻毛をぬかざるより起りたるたはけなり。唐は唐、日本は日本、昔は昔、今は今なり。三代といへども礼樂は同じからず、立て拱するが礼なりとて、今貴人の前で立れもせず。
〔風流志道軒伝〕卷一

風来仙人に多く源内自身の属性が与えられていることは『風来山人集』の頭注に指摘されるとおりである。右の引用、特に「腐儒」批判の部分は、先行研究^{〔三十四〕}においても、源内の論述としてしばしば引用される。源内は、風来仙人の口を借りて、度を越えて中国の古典に従う儒者を風刺していることが確認できる。

さらに、彼は、

唐の法が皆あしきにはあらず、されども風俗に應じて教ざれば、又却て害あり、日本人は小人島を虫のごとく思へば、また大人は日本人を見せものにし、(中略) 手長・足長のふつり合なること、皆是土地の風俗なり。天竺の右肩合掌、日本の小笠原、其仕うち替れども、礼といへば皆礼なり。只聖人のすみがねにて、普請は家内の人数によつて、長くも短くも大にも小にも、変に應じて作るべし。

『風流志道軒伝』巻五)

のように、風来仙人の口を借りて、外国の考え方を利用する際、自分の国に合うように処置すべきと述べる。

「唐は唐、日本は日本」、「風俗に應じて」のような文言には、源内の外国の文化を受容する際の意識を垣間見ることができ。本草学者、蘭学者であり、外国知識の摂取の最先端にいる源内であるが、外国のものに積極的に触れながらも、それを盲目的に利用するのではなく、自国の風土に合うように吟味しつつ活用する必要性を説いている。

以上から、源内の論述と、作中の仙境描写などに見える措置との方向性が一致していると言える。

なお、既に知られるように、儒学を排撃する国学者と異なり、源内は儒学そのものを批判していない^(二二二)。この儒学に対する態度は文学表現の問題に直結しないが、両者に通底するものがあるように思われる。源内は中国の古典籍へ盲従する現象を非難する^(二二三)。一方、彼自身が創作に漢籍の表現を借用しているように、漢籍の利用そのものは批判していない。このように、彼の批判対象が中国文化ではなく、その受容の際における「中庸を知らざる」過度の崇拜者や盲従者であるという態度は、漢籍

受容にも通底することである。

仙境は元々中国由来のものであるが、単に『桃花源記』や『遊仙窟』から表現を得て並べるだけでは彼の批判する盲従者と同じようになる。それとは逆に、日本的な描写の追加などの工夫によつてもたらされる効果について、以下のことが挙げられよう。

第一に、文飾の意味合いにおいて、四季の詳細描写のない『風俗遊仙窟』に比べ、文章の優美化と仙境景物の可視化に成功している。

第二に、仙境の創出の面において、既に仮名草子など先行作品に散見するような、唐土の仙境の単純な再現のみに留まらず、日本的な趣向・表現の利用によつて、日本の風俗に合致した仙境を創出できる効果が生じる。

第三に、第二と関連することであるが、物語の進行(主要人物の登場)の面において、「日本」の仙人と設定される風来仙人の登場に、環境の意味での下地を作ることができる。仙境訪問譚の構築において、仙人の造形と、仙境の創出との間で創作手法(和漢融合)の一貫性を保っている。

第四に、源内の思想主張を背景に考えると、この工夫は、源内の外国文化の受容意識の踐行である可能性が考えられ、正しい受容の仕方に関する、源内による例示であるという見方もできるかもしれない。

このように、四季同時、歌語的表現のような日本的趣向を取り入れることや、仙人の人物設定などは、中国的なものを利用しつつも、日本の風俗に適合する仙境を描き出そうとする源内の意識を反映している可能性があるのではないか。

五 おわりに

本稿では、異郷訪問譚の系譜から『風流志道軒伝』における仙境描写を検討した。四季同時の趣向や四季描写が近世に新たに創作された異郷訪問譚において一般的ではなく、四季描写を漢籍の描写と融合させる作品が稀少であるという調査結果から、彼は四季同時の趣向・描写を意識的に選択し、それを漢籍の描写に接ぎ合わせたことが推測される。このように仙境を描写した理由の一つの可能性として、日本の風俗に適合する仙境を作り出す意図があつたこと、漢籍由来の素材の活用に際して、自国の文化をも無視せずに取り入れるという源内の受容姿勢があつたことを提示した。そうであれば、本作の仙境描写は、源内の外国文化・事物に関する主張を反映した可能性があり、その理念の文学創作における実践とも位置づけることができる。源内の思想的立場、特に儒学の諸学派との親疎について、従来定論はないが、彼の外国文化受容の論述や漢籍受容の姿勢の検討を契機にして、当時の学問界、思想界との繋がりを再検討しつつ源内作品の研究を進めることは、彼の思想主張や創作姿勢のさらなる解明に繋がるはずである。

また、上代と中世の異郷訪問譚については先行研究が備わるのに対して、伝存資料の膨大さが一因となり、近世の異郷訪問譚を正面から総合的に取り上げた研究は未だ現れていない。本稿では、研究の基盤を築くため、近世前中期における資料を収集し、異郷描写の様相を検討した。今後、調査範囲や研究視点を拡大しながら分析を積み重ねることにより、異郷訪問譚の全体像、作品・作者の個別的特性をより深く理解することができよう。

[注]

- (一) 中村幸彦校注、日本古典文学大系『風来山人集』(岩波書店、一九六二)に、『遊仙窟』の書名が解説で典拠として言及され、該当箇所本文が頭注で引用される。
 - (二) 『桃花源記』によることが注(一)『風来山人集』の解説で指摘され、該当箇所本文が頭注で引用される。
 - (三) 池澤一郎「平賀源内——「平賀ぶり」と漢詩文との共鳴」『国文学解釈と鑑賞』六十六・九、二〇〇一。
 - (四) 注(一)『風来山人集』頭注。
 - (五) 野田寿雄「近世後期の異国遍歴小説」『国語国文研究』三十一、一九六五。
 - (六) 『西遊記』(明世徳堂刊「新刻出像官板大字西遊記」第七十三回、毘藍婆が住む紫雲山千花洞の外の描写に、「寒鴉棲古樹、春鳥噪高樗。夏盈田□^田広、秋禾遍地余。四時無不落、八節有花如」がある。四季同時の可能性もあるが、このような四季の景物がある描写は、漢籍(文言小説、白話小説の両方)においては稀少である。比較的多いのは、松・竹・樟・檜などの植物、『西遊記』複数回、『警世通言』巻四十、『水滸伝』第一回など)、珍しい植物(『西遊記』複数回など)、常と同じ季節である描写(『醒世恒言』巻三十八「異草奇花、八節有長春之色」など)、花がいつも咲いている描写(『西遊記』第四回の「有千千年不卸的名花」など)である。
- なお、『西遊記』に諸本が多いが、最も一般に流布した清刊本の『西遊真詮』(大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、一九六七)所収「商舶載来書目」享保九年の条などに記録あり)には、前掲第七十三回の四季景物の描写

は見られない。また、明楊閩齋刊本（日本内閣文庫蔵『新鐫全像西遊記伝』）にも該当描写はない。さらに、『西遊記』を和訳した『通俗西遊記』初編が宝暦八年（一七五八）に刊行されたが、該当回は収録されていない。

(七) 東京大学国文学研究室蔵奈良絵本『かくれさと』の本文は、「うへ木には、月に花さく、かつらの木、^③せんかのきく、いろをあらそひ、^①よしののさくら、おのへのまつ、露しもそめし、くれなるの、やしほのおかの、^⑤したもみぢ、西行法師が、いにしへ、かればのかぜを、ながめたりし、^④なにはのあしの一むら、ありはらの中将の、あづまのたびに露分し、うつの山辺の、^⑥つたかえで、（中略）北よりつづく、山をみれば、たかねの雪は、きえやらで、まどにうつるふ、^①梅がかを、君ならではと、にほふらん。^①のきにさえづる、うぐひす、うつばりにすくふ、つばめ、いでん山ぶき、みかさのつゝじ、^②おちくるたきに、うつろひて、にしきをさらす、ごとくなり。（中略）^①いそにはあまの、しほたれて、玉もとり、いそなをつむ。（中略）山のうしろは、^④すみがまなり。かればのもみぢ、をりくべて、ながふてほそく、たちのぼる、けぶりのすゑも、あはれ也」である（番号の^①^②^③^④は、それぞれ春夏秋冬を表す）。『風流志道軒伝』にある、春の鶯が梅の枝を木伝うという表現や、夏の卯花、子規、秋の鹿、冬の千鳥という要素などは、『かくれさと』には見られない。なお、他本の明暦二年刊『かくれ里の物語』は上巻欠のため、該当箇所を確認できないが、現存下巻の本文は奈良絵本とほとんど相違がないことは、『室町時代物語集』五「解題」に指摘される。

『諏訪の本地』諸本系統のうち、七十二の地下の国々を遍歴する内容を持つのは、諏方系である。たとえば、京都大学蔵寛永二

年写本『諏訪縁起物語』の本文は、「十てうばかり行て国宥、^②夏の季とおぼしくて、田のくさどるところなるに、（中略）此国をひがしへ行とておしへ給へば、そのごとく東へ行ほどに、また又大なる穴あり、道ならば七八里ほど行て見たまへば、^⑥秋とおぼしくて、いねかる国なり、（中略）またかの国よりきたへむきて行ほどに、大なる人穴あり、四五十てうばかり行て見たまへば、^②さなへとる国なり、（中略）かくのごとく、七十二の人穴をすぎて、大なる国出ず、其国は、^③秋のころとおぼしくて、木ぞのこずへ、うすもみぢ、我身のうへやらんと心ほそく、かなしくさびしきこと、かぎりなし」である。『風流志道軒伝』と具体的な文言の一致が見られない。なお、紙面の関係上、諏方系の他本（天正本、弘化本）の引用を省略するが、この相違点は、他本においてもほぼ同様である。

(八) 以下に主な先行研究を挙げる。

- ・市古貞次「異郷小説」『中世小説の研究』、東京大学出版会、一九五五。
- ・徳田和夫「四方四季の風流」『お伽草子研究』、三弥井書店、一九八八。
- ・勝俣隆「中世小説（お伽草子）における樹木の諸相 四方四季の庭園の樹木、聖樹、宇宙樹、並びに擬人化された樹木」

（正道寺康子編『ユーラシアのなかの宇宙樹・生命の樹の文化史』、勉誠出版、二〇一八）。

(九) 『風流志道軒伝』巻五には、「鏡を取て指むくれば、彼浦島が昔にはあらで、今まで若かりし浅之進、八十ばかりの翁と変じ、からだには肉薄く、顔は皺のみにして領長く、鬢髭も皆ぬけて、おのづから法体の姿をあらはしければ」のように、主人公が最後に

翁と交じる場面において浦島伝説に言及する。

(十) 朝倉治彦ほか編『仮名草子集成』第一巻〜第六十九巻（東京堂出版、一九八〇〜二〇二二）。

(十一) 浮世草子大事典編集委員会編『浮世草子大事典』（笠間書院、二〇一七）。

(十二) 叢の会編『草双紙事典』（東京堂出版、二〇〇六）。

(十三) 源内作品に影響を与えた談義本が、先行研究において個別に指摘されているが、それらをまとめて論じたのは、石上敏「平賀ぶり」溯源——談義本の影響について『岡大國文論稿』十九、一九九一）である。そこに言及される『当世下手談義』、『風俗七遊談』、『聖遊廓』（洒落本）、『花菖蒲待乳問答』、『泉台治情』（洒落本）、『当世花街談義』、『見外白宇瑠璃』、『斎齋榜山作品』（『田舎莊子』、『田舎莊子外篇』、『河伯井蛙文談』、『再来田舎一休』、『六道士会録』、『英雄軍談』、『雑篇田舎莊子』、『禁現大福帳』、『踊婦伝』、『風俗八色談』十七点に加え、野田寿雄「談義本の発展」『近世小説史論考』塙書房、一九六一）に指摘される『不埒物語』、『風来山人集』解説に作品名がある『風俗遊仙窟』（注（十七）参照）二点も対象とし、総計十九点を扱う。

(十四) たとえば、宋代成立の史書『新唐書』卷一百六十七列伝第九十二における「天台山靈仙所舍、多異草」、宋代成立の説話物語集『太平広記』卷九十五異僧第九における「天人皆長大、身有光明。其殿堂樹木、皆是七宝」など、枚挙に暇がない。

(十五) 石上敏「平賀源内の戯作への浮世草子の影響について」『解釈』三十八一五、一九九二）。

(十六) 瑠璃など修飾語の使用は、本来は仏典・漢籍の影響を受けたものであるが、既に異郷描写の常套句になっているため、『風流

志道軒伝』のような漢籍（『桃花源記』『遊仙窟』）に大きく依拠するのは異質であると考えられる。

(十七) 『風流志道軒伝』と『風俗遊仙窟』には、細かい要素の類似が存在する。たとえば『風流志道軒伝』の「花実時をあらそひ」、「匂ひの薫来て」、「幾間ともなく廊下を伝ひ行て」は、それぞれ『風俗遊仙窟』の「花開け実をむすぶ」、「薫風南より来り」、「長廊を行過て」と対応させることができる。

『風流志道軒伝』と『風俗遊仙窟』との関連に言及した先行研究は少なく、中村幸彦『風来山人集』解説に、「美女の案内するのは、やはり遊仙窟によるものであろう。どこか似通った風俗遊仙窟（寛延三年）が既に出版されていた」と述べられるように、書名に言及がある程度である。ただし、該当箇所頭注に示されるのは『遊仙窟』のみであり、この『遊仙窟』との関連を示す説が後にも引用され、通説となっている。

(十八) 城福勇『平賀源内』第三章（吉川弘文館、一九七二）。

(十九) 小池正胤・叢の会編『江戸の絵本 初期草双紙集成』四（国書刊行会、一九八九）に、『太平記』、『風俗文選』、『俳諧類船集』の例が挙げられ、「天狗と杉とは関連のあるものとしてイメージされていたようである」と指摘される。

(二十) 拙稿『風流志道軒伝』における仙人伝記の利用（『国語国文』九十二—三、二〇二二）。

(二十一) 吉田祐暉彦『平賀源内の人と文学』「源内の諷刺」章（日本洋学史研究会、一九五八）、野田寿雄「平賀源内について」『日本文学』二十一—九、一九七三）。

(二十二) 城福勇『平賀源内の研究』「思想的立場」章（創元社、一九七六）に、「源内の儒仏批判と国学者のそれとの間には、根本

的に相違するところがある。すなわち、国学者の場合は、儒仏を批判し、排撃することなくしては成立しえない底のものである。のみならず、国学における儒仏批判は、その重点が常に儒教におかれ、(中略) 源内の儒仏批判は、重点がむしろ仏教にある。少なくとも儒教は、本来の姿において排斥されていない。これに反して仏教は、内容的・教理的に否認されているのを知るのである」と指摘される。

さらに、源内と儒学の諸学派との関係について説明すると、彼は宝暦七年(一七五七)に林家に入門したが、注(二二) 前掲書が、源内は「理学を尊ぶ朱子学よりも、むしろ人情を尊重する古学に好意的であった(中略) 彼は仁齋学に、特に好意的であった」と指摘し、福田安典「平賀源内と『名物六帖』」(前田富祺先生退官記念論集刊行会編『日本語日本文学の研究』二〇〇一)は、源内作品における『名物六帖』の多用と古義堂系学者への皮肉な扱いの両存から、源内の古義堂へのこだわりを指摘した。

一方、中野三敏「狂文意識の背景」『戯作研究』中央公論社、一九八一)は、陽明学的「狂」が江戸中期の「文人達に諷諫、議論の書を続出させる原因であった」と述べ、同「狂文論」は、狂文戯作の作者として、源内を含む複数人を挙げる。ただし、源内における陽明学の影響の詳細までは論じられていない。

なお、源内作品における「礼」や「唐の法」が国、時の変に対応して作るべし、という主張に直接的な影響があるかどうかは断言できないが、一つの先蹤として、陽明学派の時処位論があった可能性がある。

(二十三) たとえば、源内著、安永三年(一七七四)刊の「放屁論」

には、「近年の下手糞ども、学者は唐の反古に縛られ、詩文章を好む人は、韓・柳・盛唐の鮑脣を拾ひ集て柱と心得(中略) 其余諸芸皆衰へ、己が工夫才覚なければ、古人のしふるしたる事さへも、古人の足本へもとどかざるは、心を用ざるが故なり」がある。

〔付記一〕

本文の引用は、特に断らない限り、平賀源内作品は中村幸彦校注、日本古典文学大系『風来山人集』(岩波書店、一九六一)、『西遊記』は古本小説集成『西遊記(世徳堂本)』(上海古籍出版社、一九九二)、『警世通言』は嚴教易校註『警世通言』(作家出版社、一九五六)、『醒世恒言』は顧学頌校注『醒世恒言』(作家出版社、一九五六)、『かくれさと』は横山重・太田武夫校訂『室町時代物語集』五(大岡山書店、一九四二)、『諏訪縁起物語』は横山重・太田武夫校訂『室町時代物語集』二(大岡山書店、一九三八)、『新唐書』は『新唐書』(中華書局、一九七五)、『太平広記』は京都大学文学研究科図書館所蔵乾隆二十年槐陰堂刊本によった。引用に際して、旧字体を新字体に改め、私に句読点、濁点などを付したところがある。

〔付記二〕

本稿は、令和四年度京都大学国文学会(於京都大学、二〇二二年十一月)の口頭発表をもとに作成したものです。発表の際に御教示を賜りました先生方、時処位論について御教示を賜りました大谷雅夫先生に深謝申し上げます。

(ふ) ぎょうらい・本学大学院文学研究科博士後期課程)

表二 仮名草子における異境訪問譚の四季描写・植物描写

【凡例】

1. 「●」は、その要素が作品に見えることを示す。
2. 「珍しい植物」は、「名もしらぬ草の花」「めなれぬ草木」「異草」など見慣れない植物、「七宝の樹」など想像上の植物を総称したものである（以下同様）。
3. 「実在の植物」欄の表記は底本に従う（以下同様）。一方、植物が挿絵にある場合は「絵に杉」のように示す（表三も同様）。
4. 「底本」欄における数字は、『仮名草子集成』の巻数である。

番号	刊年	作品名、作者	該当巻	四季	珍しい植物	実在の植物	場所	備考	底本
①	万治三年 （一六六〇）	『法花経利益物語』 浅井了意か	巻四 の九		●		竜宮	唐・僧祥『法華伝記』を仮名に和らげた書。	六十
②	万治三年 （一六六〇）	『三井寺物語』 浅井了意か	中巻 の一				水底		六十
③	寛文二年 （一六六二）	『安倍晴明物語』 未詳	巻二 の四		●	松	五台山		一
④	寛文四年 （一六六二）以前	『戒殺放生物語』 浅井了意か	巻四 の三			梅、藤の花、 松をそ桜、 かきつばた、 山吹、卵の 花、薔薇、花 立ばな、萩、 浅茅、しらぎ く、紅葉、 すゞき	竜宮	竜宮描写がないのは、原典『戒殺放生文』に同じ。	十三
⑤	寛文六年 （一六六六）	『御伽婢子』 浅井了意	巻一 の二		●	松 （絵に松） 苔、桑、麻	山奥 仙境（隠 れ里）	「玉の樹」は原話『金鬘新話』、「竜宮赴宴録」に従う。 い、「五色花」「四色蓮」も仏典に散見する。 「麻」は原話『剪灯新話』「天台訪隠録」に従う。	七

表二(続き)

番号	刊年	作品名 作者	該当		珍しい植物	実在の植物	場所	備考	底本
			巻	同季 同時四方					
⑭	(元禄十一年 (一六九八)	『怪談全書』 林羅山	巻一 の五			槐 (絵に松)	穴	「槐」は原話の淳于禁の故事に同じ。	十二
⑬	(元禄五年 (一六九二)	『狗張子』 浅井了意	巻一 の一		●	竹、小松、桃 (園、桜の林 に絵に松)	仙境	「松」は、原話『本朝神社考』「三保」に同じ。	四
⑫	(元禄二年 (一六八九)	『塵塚』 未詳	巻三 の四				仙境	植物描写がないのは、原話『剪刀新話』「申陽洞記」に同じ。	五十
⑪	(貞享四年 (一六八七)	『奇異雑談集』 未詳	巻六 の三				猿の洞		二十
⑩	(天和(一六八一) 八四)年間	『無常重夢物語』 未詳	上巻				地獄		六十
⑨	(延宝七年 (一六七九)	『和訳好生録』 釈河水	巻四 の四				竜宮	植物描写がないのは、原話『好生録』「孫真人未得仙時」に同じ。	六十
⑧	(寛文十二年 (一七二二)	『小さかづき』 山岡元隣	巻二 の四			槐	蟻穴	「槐」は原話の淳于禁の故事に同じ。	二十
⑦	(寛文十一年 (一六七一)写)	写本『円居草子』 未詳	上巻 の一		●		仙境	珍しい植物が「春秋ひとしくさかへはびこれり」と書かれる。	六十
⑥	(寛文十一年 (一六七一)頃)	『一休諸国物語』 未詳	巻二 の十			(絵に杉か)	山(天狗 関係)		三
			巻十 の一				隠れ里	本文に植物描写がないのは、原話『剪刀新話』「申陽洞記」に同じ。	
			巻九 の二		●		仙境	植物が珍しいことは、直前の描写(原典『博異記』「陰隠客」の「有大樹、身如竹有節、葉如芭蕉、又有紫花如盤」)に基づく敷衍か。	
			巻八 の一				竜宮	本文に植物描写がないのは、原話「大足初有土人」に同じ。	
			巻六 の一			(松 に絵に松)	蝦の国	本文に植物描写がないのは、原話「大足初有土人」に同じ。	
			巻三 の二		●	(松 に絵に松)	鬼谷	原話『剪刀新話』「大虚法司伝」は「古柏林」。	

表三 浮世草子、談義本における異境訪問譚の四季描写・植物描写

【凡例】

1. 異境訪問譚ではないが、異郷関連描写のある作品も表に入れ、その旨を備考欄に記入した。異郷訪問譚であるものの、作品に描写がないものは、表に入れなかった。

2. 『西村本小説全集』を『西村』、『日本古典文学全集』を『全集』、『定本西鶴全集』を『定本西鶴』、『新編西鶴全集』を『新編西鶴』、『元禄好色草子集』を『元禄』、『日本古典文学大系』を『大系』、『徳川文芸類聚』を『徳川』、『叢書江戸文庫』を『叢書』、『八文字屋本全集』を『八』、杉本和寛「零本『好色閨魔歌舞記』小考」(二〇一二)を「杉本翻刻」、玉川大学教育芸術情報図書館蔵寛保三年刊本を「玉川大学蔵本」、京都大学附属図書館蔵宝暦十四年刊本を「京都大学蔵本」、『京都大学蔵大惣本稀書集成』を『大惣本』、咲本英恵・本多亜紀・内田保廣「不埒物語翻刻」(二〇一二)を「咲本翻刻」と略称する。

番号	刊年	作品名、作者	該当		珍しい植物	実在の植物	場所	備考	底本
			四季	同時四方					
①	天和三年 (一六八三)	『新御伽婢子』 西村市郎右衛門	卷四			葛のかづら、松、 苔(絵に松)	戸隠山、仙 境		上『西村』
②	貞享二年 (一六八五)	『宗祇諸国物語』 洛下旅館	卷一		●	蓮、杜若(絵に 蓮、杜若、松か)	山神の社		上『西村』
			卷二			杉 (絵に杉か)	「魔境」 (天狗関 係)		
③	貞享二年 (一六八五)	『西鶴諸国ぼなし』 井原西鶴	卷二 の五			隠れ里	時節は冬であるが、ここの景色は春である。	『新全集』 六十七	
④	貞享三年 (一六八六)	『近代艶隨者』 西鷺軒橋泉	卷一		●	芳芷	窟 「靈山」、 縹緗城		『定本西鶴』 十四
⑤	貞享三年 (一六八六)	『本朝二十不孝』 井原西鶴	卷二 の三			蘆、まこも、松、 杉、並木ざくら (絵に松、杉)	疱瘡の神の 島	四季が揃っていない。季節や四季の明言もない。	『新大系』 七十六
⑥	貞享三年 (一六八六)	『浅草拾遺物語』 西村市郎右衛門	卷二 の二		●	草、杉、紅白の花、 松、杉(絵に松、杉)	女護の島		下『西村』

表三 (続き)

番号	刊年	作品名、作者	該当巻	四季	珍しい植物	実在の植物	場所	備考	底本
⑦	貞享四年 (一六八七)	『御伽比丘尼』 西村市郎右衛門	巻一	同時 四方		桜、藤、山ぶき	隠家	(1)異郷描写ではないが、僧の季節を呼ぶ能力の描写あり。(2)春夏秋冬の景色が現れるが、同時ではない。(3)春夏秋冬の景色が現れるが、同時ではない。(4)春夏秋冬の景色が現れるが、同時ではない。	『西村』 下
⑧	貞享四年 (一六八七)	『懐硯』 井原西鶴	巻二			桜、蔦、杉、松 (絵に杉、蔦、松か)	山、美童の岩窟		『新編西鶴』 三
⑨	元禄四年 (一六九二)	『梶久二世の物語』 (改題本『新小夜嵐』による) 井原西鶴	上巻 の二		●	楊梅、水仙、萩、松、藤、茄子、唐辛子	地獄へ続く道 地獄、住家		『定本西鶴』 二
⑩	元禄八年 (一六九五)	『好色酒呑童子』 桃林堂蝶塵	巻四		●	(絵に草)	隠家	(1)「四季の間に客僧たちをせうじ」のみ。(2)酒呑童子の話をもじった好色物。厳密な意味での異郷ではない。	『元禄』 二
⑪	元禄九年 (一六九六)	『玉簪木』 林義端	巻一				地獄		『徳川』 四
⑫	元禄十年 (一六九七)	『西鶴冥途物語』 幻夢	巻四		●	〔大量のため、源内との共通箇所のみを記す〕もみぢ	極楽		『徳川』 三
⑬	元禄十一年 (一六九八)	『小夜嵐物語』 未詳	巻一			梅、初桜 (絵に柳など)	地獄	(1)訪問譚ではないが、地獄描写あり。(2)春の景物のみ。	『徳川』 三
⑭	元禄十七年 (一七〇四)	『金玉ねぢぶくさ』 章花堂	巻四 の二		●		仙境		『叢書』 三十四
⑮	元禄十七年 (一七〇四)	『拾遺御伽婢子』 柳糸堂	巻二 の五		●	桃李のはな	弁才天の浄土 竜宮		『徳川』 四

表三 (続き)

番号	刊年	作品名、作者	該当	四季	珍しい植物	実在の植物	場所	備考	底本
②0	正徳二年 (一七一二)	『魂胆色遊懐男』 江島其磧	巻一			松、杉 (絵に杉、松)	山、洞		三『八』
①9	宝永六年 (一七〇九)	『新玉櫛箭』 青木鷲水	巻六		●	松、柏、桃 (絵に桃)	仙境	「桃また数百株ありて花さけるあり実の れるあり」とある。	『青木鷲 水集』四
①8	宝永六年 (一七〇九)	『好色間魔歌舞記』 西沢一風	巻二	●		梅、初桜、松、芦	地獄	四季の景物があるが、季節や四季の明言 なし。	杉本翻刻
①7	宝永三年 (一七〇六)	『御伽百物語』 青木鷲水	巻一			(絵に松)	穴		二『叢書』
			巻七			榊 (絵に榊、松)	竜宮		
			巻三			(絵に広葉樹、松)	穴		
			巻六			(絵に松)	狐の「大家 高殿」		
			巻一			栗、棗	未知の国	四季がなく、いつも秋に似る。	
			巻五		●	苔 (絵に松、杉か)	窟		
			巻二		●		山、洞、霊		
			巻一			(絵に広葉樹)	「地府」		
			巻三			茅萱 (絵に柳、松、杉 か)	山(鬼闕 係)		
			巻二			(絵に松か)	「銀河」、 「仙宮」		
①6	元禄十七年 (一七〇四)	『多満寸太礼』 辻堂非風子	巻一			(絵に杉、松か)	山(天狗闕 係)		三十四『叢書』

表三 (続き)

番号	刊年	作品名、作者	該当巻	四季	珍しい植物	実在の植物	場所	備考	底本
21	正徳三年 (一七一三)	『和漢乗合船』 落月堂操扨	巻一			槐	蟻の国、穴		『叢書』 三十四
22	正徳五年 (一七一五)	『丹波太郎物語』 江島其磧	巻二			(絵に松)	山(鬼闕)		『叢書』 五
23	享保二年 (一七一七)	『風俗傾性野群談』 未練か	序			(絵に松)	山、仙境		『叢書』 六
24	享保三年 (一七一八)	『猿源氏色芝居』 九二軒鱗長	巻五		●		隠れ里		『叢書』 六
25	享保四年 (一七一九)	『義経倭軍談』 江島其磧	巻二			梅、すいせん、す ぎな	山、仙人の家	「時ならぬ梅すいせん」とある。	『江戶時代文芸資料』二
26	享保十四年 (一七二九)	『六道土会録』 伏齋栲山	巻一			葛藤 (絵に杉)	山、天狗の住処		『叢書』 七
27	享保十七年 (一七三二)	『太平百物語』 伴祐佐 (高木幸助画)	巻二			(絵に杉か)	冥途 死出の山、 住処		『叢書』 十三
28	享保十九年 (一七三四)	『御伽厚化粧』 筆天齋	巻三			(絵に広葉樹)	小栗栖(化物 関係)		『叢書』 二
			巻四			(絵に松か)	山、天狗の 住処		
			巻六			(絵に松か)	隠れ家の、妖 術使いの女		
			巻三			(絵に広葉樹)	蜘蛛の住処		
			巻二			竹	隠れ里		『徳川』 四
			巻一			菖蒲、杜若	蛙の国		

表三 (続き)

番号	刊年	作品名、作者	該当		四季	珍しい植物	実在の植物	場所	備考	底本
			巻	同時四方						
37	宝暦十三年 (一七六三)	『風流志道軒伝』 平賀源内	巻一	●			桃花、梅、松、卯の柏	仙境		『大系』 五十五
36	宝暦八年 (一七五八)	『陽炎日高川』 八文字李秀・素玉改 自笑	巻二 の三				杉 (絵に杉)	山(天狗関 係)		『八』 二十二
35	宝暦八年 (一七五八)	『見外白字瑠璃』 舎業齋鈍草子	巻一 の二	●			(絵に竹)	蟻の国	巻五の五に四季同時の描写があるが、場所は京都であり、異郷ではないように思われる。また、源内の描写と重なる要素は「紅葉」「雪」のみ。	『滑稽文学全集』 七
			巻四 の五				杉 (絵に杉)	極楽		
34	宝暦五年 (一七五五)	『不埒物語』 南啓堂梅翁	巻四 の一					「安楽世界 国」	(1)訪問譚ではないが、異郷描写あり。場常に多くの花が咲き、木の実をむすぶ。(2)	咲本翻刻
33	寛延二年 (一七四九)	『風俗遊仙窟』 克齋	巻一 の一	●			葛、松、柏 (絵に松など)	仙境	四季の詳細描写なし。	『大懇 本』二
32	寛延元年 (一七四八)	『盛久側柏葉』 多田南嶺	巻四 の三		●			仙境	「草木ときはの花をひらけり」とある。	『八』 十八
31	寛保三年 (一七四三)	『楠素人軍談』 (改題本『楠正成艶 群談』による) 其邑	巻一 の一				杉 (絵に杉)	山(天狗関 係)		蔵本 京都大学
30	元文六年 (一七四一)	『怪談はらつづみ』 頓口軒	巻二 の一					竜宮		玉川大学 蔵本
29	元文五年 (一七四〇)	『竜都俵系図』 多田南嶺	巻四 の一			●		竜宮		『八』 十五

表四 草双紙における異境訪問譚の四季描写・植物描写

【凡例】

1. 異郷と認められるかが明確ではない怪物退治譚も表に入れ、その旨を「該当場面」欄に記入した。
2. 「実在の植物」欄における「○」は、本文になく、挿絵にあることを示す。
3. 『叢 草双紙の翻刻と研究』を『叢』、『新日本古典文学大系』を『新大系』、『近世子どもの絵本集 江戸篇』を『近世』、『江戸の絵本 初期草双紙集成』を『江戸』と略称する。

番号	刊年	作品名、 画工・作者	該当場面	四季		珍しい 植物	実在の植物	場所	備考	底本
				同時	四方					
①	宝暦前期か	『はん女があぶぎ』 鳥居清倍	天狗の場面 (四ウ・五ウ)				松	童宮 (天狗関 係)		『叢』 十七
②	宝暦四年 (一七五四) 頃	『亀甲の由来』 未詳	童宮の場面 (複数)					童宮		『新大 系』 八十三
③	宝暦八年 (一七五八)	『浦島七世孫』 鳥居清重	茨木童子の片腕を斬る場 面(六ウ・七ウ) 山奥に入って大猫を殺す 場面(十二ウ・十三ウ)				(杉、松)	(茨木童子 関係) 山(大猪関 係)	松が多数の場面に散見される のに対して、杉は上記両場面 のしか見られないため、意図 的に使われていると思われる。	『叢』 十八
④	明和四年 (一七六七)	『金時一代記』 未詳	土蜘蛛退治 (十二ウ・十三ウ)				(杉、松 か)	塚(土蜘蛛 関係) 市原野(鬼 同丸関係)		『叢』 二十
⑤	明和六年 (一七六九)	『雙面魃』 未詳 鳥居清満か	山中で女性に鬼の城への 道案内を請う場面 (十一ウ)				(杉)	山(酒香童 子関係)		『叢』 十四
⑥	明和七年 (一七七〇)	『義仲一代記』 鳥居清経	戸隠山に行き、蟒蛇を退 治する場面 (六ウ・七ウ)				(杉)	山(蟒蛇関 係) 山(天狗関 係)	本作には複数の植物が描かれ るが、上記両場面に見られる のは杉のみ。鳥居清経が意識 的に杉を異類・山描写に用い ていると推測できる。	『叢』 二十一

表四 (続き)

番号	刊年	作品名、 画工・作者	該当場面	四季		珍しい 植物	実在の植物	場所	備考	底本
				同時	四季					
⑦	明和八年 (一七七七)	『浮世夢助出世噺』 鳥居清経	山中で天狗を騙す場面 (三才・三ウ)			杉、松	山(天狗関 係)		『叢』 十二	
⑧	安永元年 (一七七二)	『門出縁むすび』 富川房信	天狗の場面 (三ウ・五ウ)			(杉か)	山(天狗関 係)		『叢』 十六	
⑨	未詳	『武者鏡』 田中益信	退治場面 (複数)			(松か)	(鬼同丸な ど関係)		『叢』 十一	
⑩	未詳	『うらしま』 未詳・富川房信か	竜王・竜宮の場面 (十四ウ・十五才)				竜宮		『叢』 十九	
⑪	未詳	『猿のいきぎも』 未詳	竜宮の場面 (複数)				竜宮		『近世』	
⑫	未詳	『篠塚角力遊』 鳥居清満	天狗の場面 (複数)			杉、柏	山(天狗関 係)		『江戸』 四	
⑬	未詳	『新うら島』 未詳	竜宮で三年を過ごす場面 (七ウ・八才)			はなざか り、水く さ、もみぢ	竜宮	(1)四季描写があるが、時間の 推移を表すと考えられ四季 同時に示すものとは異なるよ うに思われる。(2)表現や景物 の種類が『風流志道軒伝』と 異なる。	『叢』 二十	
⑭	未詳	『観世又次郎』 未詳	猿の船に向く場面 (一ウ)			(松か)	山、猿の館		『近世』	
⑮	未詳	『酒香童子廓の難 形』 未詳	酒香童子の場面 (複数)			(約二種 の 広葉植物)	山(酒香童 子関係)		『江戸』 二	
⑯	未詳	『らいこう山入』 未詳	酒香童子の場面 (複数)				山(酒香童 子関係)		『近世』	
⑰	未詳	『武者鑑』 鳥居清広	鬼が島で鬼を平伏させる 場面(六ウ・七才)				鬼が島		『叢』 十二	